

やまと 民俗への招待

鹿谷 熊

両童子岩の手前で黒砂糖をかじると一度に元気が出た。しかし時間がたつとパタリと氣力がなくなる。身をすり減らすようにして夕方たどり着いた標高800㍍の下北山村前鬼の里は、静かで美しい別世界だった。人里のたなずまいが、山中の歩行を経た者には、何とも言えぬ慰安の気持ちを抱かせる。

下北山村前鬼には古くから役行者に付き従った前鬼と後鬼の子孫とされる五鬼(五鬼熊、五鬼繼、五鬼上、五鬼助、五鬼童)の5戸があり、宿坊として大峯修行の基地的な役割を果たしてきた。水田や畠もあったが、今

は五鬼助家が営む小仲坊のみとなり、当主義之さんと夫人三津子さんが私たちを温かく迎えてくださった。いろいろと前鬼のお話を伺った事を昨日のように思い出す。

3泊4日の踏査を一旦終えて翌日奈良へ戻り、再び9月13日から15日にかけて深仙から行仙まで歩いたが、この時は2日間雨中を歩くことになり、足を冷やしてどうとう右膝を痛めてしまつた。始めは登りだけが困難だったが、そのうち下りも平地も痛みを感じ、

足を引きするようにして歩いた。自分の仕事の関係で、奥駈はこの行仙で中断してしまった。

翌2002年3月に足を引きするようにして歩いた。自分の仕事の関係で、奥駈はこの行仙で中断してしまった。



那智ヶ岳へ向かう筆者(右)=筆者提供

奥駈で風景の見方一変

「辺路調査報告書」が刊行され、それぞれ民俗編を熟筆した。04年7月には、無事世界遺産に登録された。

その後、職場も変わり、残りの道を個人的に歩きたいと願いながら実現できなかつたが、仕事仲間だった十津川村の前坂孝行さんに先達になつてもらい、07年10月に佐田の辻から吉屋の辻まで、さらに7年の休止期間を経て、14年5月に熊野本宮近くの山在峰から玉置の辻まで、翌年5月15日から16日に前坂夫妻と私は

奥駈の最後の場面で、8日で一気に跋涉する男性と出会い、互いに健闘をたたえ合つた。この奥駈の経験は、その後の風景の見方にも影響を及ぼした。

(奈良民俗文化研究所代表) 次回は29日予定

ち夫婦の4人で、山在峰から熊野本宮と本宮の辻まで古屋の辻まで歩いた。古屋の辻で大峯奥駈をようやく終えて記念写真を撮ろうとしたその時だった。北の方から重装備の山男が異様な速さで降りてきた。吉野から那智まで無補給で8日で歩くという。足かけ15年のはぎだらけの